

ダンスの授業による大学生のコミュニケーション力の変化の検討

Investigating the transformation of university students' communication skills
in dance classes

向出 章子

MUKAIDE Shoko

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

ダンスの授業による大学生のコミュニケーション力の変化の検討

Investigating the transformation of university students' communication skills
in dance classes

向出 章子*

MUKAIDE, Shoko*

要旨

本研究は、ダンスの授業を通して大学生のコミュニケーション力の変化について検討した。大学1年生143名を対象とし、6時間のダンスの授業において行った。調査内容は、授業前後においてコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsの表現力・他者受容・関係調整といった3つのスキルを用いた質問紙調査および「ダンスが好き・嫌い」等の自己評価を行った。結果、コミュニケーション・スキル尺度の調査からすべてのスキルで有意な得点の上昇が見られ、コミュニケーション力が肯定的に変化したことが確認された。授業前の結果から、本対象者は他者受容のスキルは高いが、表現力のスキルは低いという特徴が見られた。また、ダンスが好きな学生は、嫌いな学生より元々高いコミュニケーション力を身につけていることが推測できたが、ダンスが嫌いな学生の方が表現力が高まったことが示された。今回の結果の要因として、即興表現・模倣およびグループ活動が影響している可能性が示唆された。

キーワード: コミュニケーション ダンス 即興表現 模倣

1. 問題と目的

グローバル化が進む現代社会において、多様な価値観や背景をもつ人々と交流し互いに理解し受容することが求められる。このようななかにおいて人と人を繋ぐコミュニケーション力はますます重要になる。このコミュニケーション力の捉え方は一様ではなく多義に用いられる。斎藤⁽¹⁾は、意味を的確につかみ感情を理解し合う力であるとしている。

近年、コミュニケーション力の低下が叫ばれている。その対応策として、文部科学省⁽²⁾は芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を展開する事業を実施した結果、他者認識、自己認識の力の向上、伝える力の向上、自己肯定感と自信の醸成などの効果が見られたことを報告している。

一方、学校教育におけるダンスの授業は、「表現系ダンス」「リズム系ダンス」「フォークダンス」で構成され、イメージやリズムにふさわしい動きを見つけたり仲間と共に感じを込めて踊ったりするなど仲間との身体交流によって「豊かなコミュニケーション能力」が培われる運動である。また、新学習指導要領の中学校1・2年生の保健体育におけるダンス領域の必修化は、学習経験の量的な拡大と共に、心身の解放や「身体表現を通じたコミュニケーション能力の育成」といったダンス系領域の特徴的な学びを保證する可能性においても期待したものとされている⁽³⁾。

これまで、ダンスの授業によるコミュニケーションに関する先行研究として、即興表現や創作ダンスの創作過程に注目した研究が多い。たとえば、猪原ら⁽⁴⁾は、中学校女子の創作ダンスの授業において、生徒間のコミュニケーションの不調やそれに伴う葛藤の解消を目的として数種のエスニックダンス（民族舞踊）を導入した結果、創作過程の初期段階から生徒間のコミュニケーションがスムーズになり、ダンスの学習効果も高まったことを報告している。一方、コミュニケーションは、他者にの

* 教育学科非常勤講師

み向けられたものだけではないという見解もある。柴⁽⁵⁾は「コミュニケーションにも、自分自身とのコミュニケーションというものが存在する。ダンスの体験は、自分自身との内、すなわち自分の内面とのコミュニケーションも必要である」ことを論じている。ダンスを用いた心理療法といわれるダンス・ムーブメントセラピーの始祖である Marian.Chace は「Dance for communication」(コミュニケーションのためのダンス)を提案しグループにおける対人関係の向上を図った⁽⁶⁾。

ところで、このコミュニケーション力は、直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーションスキルとして測ることができる。藤本・大坊⁽⁷⁾は、コミュニケーション・スキル尺度である ENDCOREs を作成し、階層構造として、自己統制・表現力・解読力は基本スキル、自己主張・他者受容・関係調整は対人スキルに分類し、基本スキルよりも対人スキルのほうがより高次のコミュニケーション・スキルとして位置付けている。

本研究では、大学におけるダンスの授業を通して学生のコミュニケーション力がどのように変化するか検討を行うことを目的とする。

2. 方法

調査対象：A 女子大学短期大学部幼児教育学科 1 年生 4 クラス全学生を対象に行った。質問紙の回答が得られた参加者 143 名を分析対象とした。

調査手続き：20XX 年、体育の前期授業の内 6 時間のダンスの授業を対象とした。授業の目標と内容を以下に示した (Table 1)。この調査は、1 回目となるダンスの授業前と 7 回目の授業時に実施した。

調査内容：質問紙は、藤本・大坊ら⁽⁸⁾が作成したコミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs を用いた。また、「ダンスが好き・嫌い」「ダンスでコミュニケーションできる」の自己評価を行った。

対象となるスキルの類似性を示すものとして表出系、反応系、管理系の系列性がある。今回は、ダンスの授業を通してコミュニケーション力の変化を検討するために、表出系の「表現力」「自己主張」から「表現力」を、反応系の「解読力」「他者受容」から「他者受容」を、管理系の「自己統制」「関係調整」から「関係調整」の 3 つのスキルを使用した。このスキルを採用した理由は、質問数も少なく負担も少ないうえ筆者がダンスという身体を媒体としたコミュニケーションの意識を図るうえで、特に重視したいスキルであるからである。「自己主張」は意見や考えの表出が中心であるのに対し「表現力」は自分の感情や気持ちといった情緒的な面の表出が中心である。また、相手の気持ちや感情を読みとったり感じ取ったりする「解読力」より集団において互いに相手の意見や立場に共感したり尊重したりする力の「他者受容」を、自己の感情などをコントロールする「自己統制」よりも人間関係の中で人との関係をどのように調整しているのかなどの「関係調整」を重視した。項目の内容は「表現力」:「自分の気持ちをしぐさでうまく表現する」「自分の気持ちを表情でうまく表現する」, 「他者受容」:「相手の意見や立場に共感する」「相手の意見や立場を尊重する」, 「関係調整」:「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」「感情的な対立による不和に適切に対処する」などである。それぞれの質問には「とてもあてはまる」は 4, 「だいたいあてはまる」は 3, 「あまりあてはまらない」は 2, 「まったくあてはまらない」は 1 とする 4 件法で行った。この調査に関しては記名式とした。その理由は、特にダンスが嫌いな学生がダンスの授業によってどのように変化したかという筆者自身の授業へのフィードバックを行うためである。

授業の目標と内容について、まず、ダンスに慣れるため遊びの要素を含んだものから始め段階を経て本格的なダンスへと発展するよう工夫した。また、表現力を高めるために即興表現およびミラーリングの活動を数多く取り入れた。さらにグループ単位での活動を重視するとともに多くの学生同士が

かかわり合えるよう毎時間異なるグループ構成を設定した。この授業は、ダンスが上手・下手等は成績には関係なく積極的に活動してダンスを楽しむように促した。同時に教員・保育士になった時に活かせるよう各時間ごとの目標を達成できるよう意識させた。

倫理的配慮：質問紙調査の意味と目的を説明し実施の同意を得た。質問紙調査は成績には関係がないこと、個人情報を守られること、結果の公表に同意しない人は、No と記入しておくことなどを伝えた。

Table 1 授業の目標および内容

授業回数・内容	内 容 の 説 明
目 標	さまざまな基本ステップを知るとともにリズムに合わせて楽しく踊る。 友達とかかわりながらダンスを楽しむ。
(授業1) ①シェーハ ②名探偵ゲーム ③ミラーリング ④基本ステップ	フロアエクササイズ1 (基本ステップを学ぶ) ①最初は全員で、頭の前に両手で山を作る。山の状態から全員で「シェーハ！」のかけごえで両手を山の斜面に沿って斜めにおろす。「ハッ！」で全員が次のいずれかの動作をやる。 ア、胸の前で手を横にする。イ、おでこにチョキの手を斜めにあてる。ウ、右か左の胸の前で腕を十字に交差させる。リーダーと同じ形になった人はアウト。 ②鬼になった人のマネを全員でやり、名探偵は誰が鬼なのかを当てるゲーム。全員が輪になって座る。探偵を一人決め、探偵の役の人には部屋の外に出る。探偵がいないうちに、鬼になる人を相談して決める。鬼は拍手をしたり、ひざを叩いたり、いろんな動作をし、他の人はそれをマネする。探偵はみんなの動きや視線をよく見て、誰が鬼かを当てる。 ③即興で表現した友達の動きをまね合う。まねする人とされる人が交代しながら行う。 ④ダンスの基本ステップを身につけるとともに、今後のリズムダンスに生かす。サイド・前後・ボックスステップ・ツーステップ・ツイスト・スライドステップ・キックとその応用。
目 標(授業2・3)	リズムに乗って体を動かしながら仲間と共に踊る楽しさや喜びを味わいコミュニケーションを深める。
(授業2) ①出会ってコミュニケーション、ボール・縄でコミュニケーション ②迷路探検 ③ミラーリング ④ひとまとまりのダンス	フロアエクササイズ2 (コミュニケーションを高める動きを学ぶ①) *柔軟運動 寝て体を伸ばす、ひねる、腹筋、柔軟 ①リーダーの指示の人数で集まる。出会った人でグループになりコミュニケーションを行う。 ・ハート ・ニワトリ ・ロデオ ・チューチュートレイン等。 ボールや縄がまるであるかのようにキャッチボールや縄跳びをする。 ②グループで協力して迷路から脱出する。特に、リーダーからの指示の動きを行いながらみんなで息を合わせて動く。 ③即興での自由な表現でグループで互いにまねし合う。 ④学生同士コミュニケーションしながらみんなで踊る。
(授業3) ①棒でコミュニケーション ②人間パズル ③ミラーリング ④ひとまとまりのダンス	フロアエクササイズ3 (コミュニケーションを高める動きを学ぶ②) ①二人組になり、棒を使って落とさないように移動する。全員でリズムカルに棒を立てて倒さないように隣に移動する。 ②パズルのように、相手のポーズにはまるようにポーズをつけていくもの。 ③即興での自由な表現でグループで互いにまねし合う。その後、グループで課題発表を行う。 ④学生同士コミュニケーションしながらみんなで踊る。
目 標(授業4・5)	表したいテーマからイメージをとらえ即興的に表現する。 リズムにのって全身で踊ることや仲間と共に踊ることを楽しむ。
(授業4) ①だるまさんの一日 ②即興表現を楽しむ ③人間彫刻 ④ひとまとまりのダンス	リズムダンス1 (即興表現の方法を学ぶ①) ①「だるまさんがころんだ」をもとにした遊びである。鬼がお題を出し、子はお題にふさわしい動きを表現するもの。鬼はだるまさんの生活の出来事を想像して言う。 ②様々なお題の動きを即興で表現する。1)一人で 2)グループでそれぞれのテーマ ③グループでテーマを彫刻するもの。テーマからそのイメージに合うものを即興的に表現する。具体的な場所や物・抽象的なことばから浮かんでくるイメージを表現してもいい。他のグループの人は、何をイメージしているか考える。1)グループでそれぞれのテーマ 2)クラスで一つのテーマ ④みんなでリズムにのって楽しみながら踊る。特に動きの工夫の仕方理解しながら踊る。
(授業5) ①出会ってコミュニケーション ②リズムを楽しむ ③ミラーリング ④人間彫刻 ⑤ひとまとまりのダンス	リズムダンス2 (即興表現の方法を学ぶ②) ①リーダーの指示の人数に集まり、集まったグループで動きでコミュニケーションを行う。 ・ハート ・ニワトリ ・ロデオ ・チューチュートレインなど ②多様なリズムを打つ。体の部位も使って工夫する。 ③即興での自由な表現でグループで互いにまねし合う。 ④グループでテーマを彫刻するもの。テーマからそのイメージに合うものを即興的に表現する。具体的な場所や物・抽象的なことばから浮かんでくるイメージを表現してもいい。他のグループの人は、何をイメージしているか考える。1)グループでそれぞれのテーマ 2)クラスで一つのテーマ ⑤みんなでリズムにのって楽しみながら踊る。特に動きの工夫の仕方理解しながら踊り、次のミニ創作へとつなげる。
目 標	リズムに乗って体を動かすことや仲間と共に踊る楽しさや喜びを味わう。
(授業6) ①ミラーリング ②ひとまとまりのダンス	リズムダンス3 (リズムに乗って楽しく踊る) ①自由な表現でグループで互いにまねし合う。 ②グループでミニ創作、課題発表を行う。 ・教員や各グループで創作したダンスを全員で踊る。コミュニケーションしながらみんなで踊る。

3. 結果

(1) 各項目ごとのダンスの授業前後によるコミュニケーション力の得点比較

ダンスの授業によるコミュニケーション力の変化を検討するため、コミュニケーション・スキル(CS)尺度、ENDCOREs の授業前および授業後の調査の結果の平均の差について t 検定を行った (Table 2)。分析には SPSS を用いて行った。

Table 2 ダンスの授業前後におけるコミュニケーションスキルの各得点の平均値および標準偏差

	授業前		授業後		t 値
	M	SD	M	SD	
(表現力)	2.70	0.54	3.18	0.51	8.91***
(他者受容)	3.38	0.47	3.71	0.38	7.68***
(関係調整)	3.25	0.51	3.52	0.47	5.73***

*** $p < .001$

結果、各得点からどの項目においても 0.1%水準で有意な差が見られ、授業後の得点の高さが確認できた。特に、もともと高かった「他者受容」は、授業後において 3.71 といずれのスキルより高得点であった ($t(142) = 7.68, p < .001$)。また、得点が一番低かった「表現力」も授業後では 3.18 と上昇率は一番大きかった ($t(142) = 8.91, p < .001$)。「関係調整」においても、授業前では 3.25 であったが、授業後では 3.52 に上昇した ($t(142) = 5.73, p < .001$)。授業前、授業後それぞれにおいて、「他者受容」が一番得点が高く、続いて「関係調整」、「表現力」が一番低く、スキル間相互の変動は見られなかった。

(2) ダンスの好き・嫌い、時期における分散分析結果

次に、ダンスの好き・嫌い(好きな群・嫌いな群) × 時期(授業前・授業後)の2要因混合計画による分散分析を行った。(Table 3)

ダンスが好きな学生は 78 名、嫌いな学生は 65 名でやや好きな学生の方が多かった。授業前においてダンスが好きな学生は嫌いな学生に比べてすべての項目において得点が高かった。また時期については、時期の主効果が有意であり、すべての項目で有意な差が見られた。ダンスが好きな学生と嫌いな学生のグループにおいては、「感情や心理状態を正しく察してもらう」「友好的な態度で相手に接する」「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」の項目については有意な差が見られたが、他の項目については差は見られなかった。「表現力」の項目である「自分の考えを言葉でうまく表現する」に関しては 5%水準で交互作用が見られた。同様に「自分の気持ちをしぐさでうまく表現する」「感情や心理状態を正しく察してもらう」に関しては 1%水準で交互作用が有意であった。「自分の気持ちをしぐさでうまく表現する」では、いずれの学生においても最も上昇率が高く、授業後ではダンスが嫌いな学生の方がダンスが好きな学生より得点が高くなったことが確認された。交互作用が見られた「自分の考えを言葉でうまく表現する」「自分の気持ちをしぐさでうまく表現する」「自分の感情や心理状態を正しく察してもらう」の得点の変化を Figure 1 に示した。

Table 3 ダンスの好き・嫌い, 時期における分散分析結果

項 目	ダンスが好きな群 (n=78)		ダンスが嫌いな群 (n=65)		群	時期	交互作用
	授業前	授業後	授業前	授業後			
(表現力)							
自分の考えを言葉でうまく表現する	2.82 (0.70)	3.18 (0.62)	2.52 (0.73)	3.23 (0.55)	n.s.	59.62** 授業前<授業後	6.37*
自分の気持ちをしぐさでうまく表現する	2.72 (0.64)	3.13 (0.59)	2.32 (0.62)	3.22 (0.60)	n.s.	104.56** 授業前<授業後	14.32**
自分の気持ちを表情でうまく表現する	3.01 (0.73)	3.32 (0.65)	2.72 (0.76)	3.28 (0.67)	n.s.	40.04** 授業前<授業後	n.s.
感情や心理状態を正しく察してもらう	2.87 (0.59)	3.05 (0.64)	2.52 (0.75)	3.02 (0.67)	5.29* 好き>嫌い	20.94** 授業前<授業後	4.54**
(他者受容)							
自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	3.33 (0.47)	3.56 (0.57)	3.17 (0.65)	3.55 (0.61)	n.s.	22.75** 授業前<授業後	n.s.
友好的な態度で相手に接する	3.47 (0.53)	3.81 (0.43)	3.22 (0.54)	3.71 (0.46)	7.45** 好き>嫌い	68.73** 授業前<授業後	n.s.
相手の意見をできるかぎり受け入れる	3.51 (0.50)	3.81 (0.40)	3.35 (0.57)	3.72 (0.45)	n.s.	41.32** 授業前<授業後	n.s.
相手の意見や立場を尊重する	3.54 (0.50)	3.76 (0.43)	3.34 (0.62)	3.72 (0.48)	n.s.	30.93** 授業前<授業後	n.s.
(関係調整)							
人間関係を第一に考えて行動する	3.38 (0.54)	3.64 (0.48)	3.17 (0.72)	3.54 (0.59)	n.s.	32.61** 授業前<授業後	n.s.
人間関係を良好な状態に維持するように心がける	3.54 (0.55)	3.77 (0.45)	3.34 (0.57)	3.68 (0.47)	4.47* 好き>嫌い	30.91** 授業前<授業後	n.s.
意見の対立による不和に適切に対処する	3.21 (0.57)	3.45 (0.60)	3.09 (0.70)	3.29 (0.63)	n.s.	12.49** 授業前<授業後	n.s.
感情的な対立による不和に適切に対処する	3.15 (0.58)	3.4 (0.59)	3.06 (0.73)	3.34 (0.59)	n.s.	17.06** 授業前<授業後	n.s.

() は標準偏差 ** p<.01 * p<.05

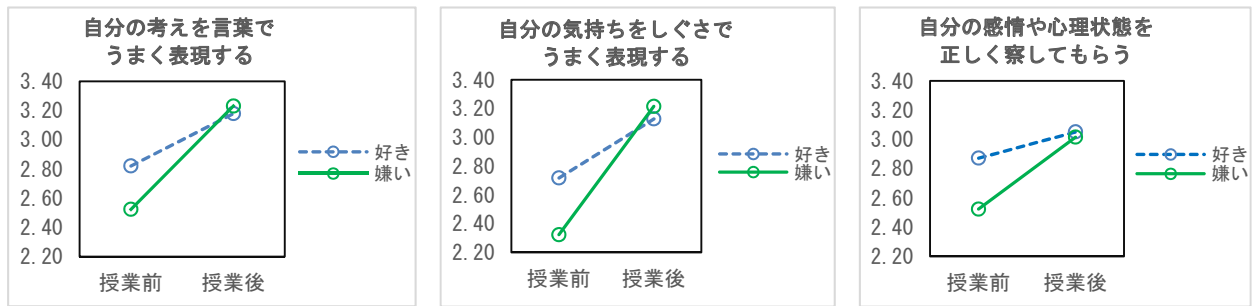


Figure 1 交互作用が見られた3項目の得点変化

(3) 「ダンスでコミュニケーションができる」についての意識の変化

授業前において、ダンスのイメージ「ダンスでコミュニケーションできる」を授業後においても同様の質問紙調査を行った。(Figure 2)

結果、授業前では、「とてもあてはまる」が34%、「だいたいあてはまる」が55%、「あまりあてはまらない」10%、「全くあてはまらない」1%であり、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」を合わせると89%の学生が「ダンスでコミュニケーションできる」と考えている。反対に「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」は11%であった。授業後では、「とてもあてはまる」が72%、「だいたいあてはまる」が26%、「あまりあてはまらない」が1%、「全くあてはまらない」が1%であり、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」を合わせると98%の学生が「ダンスの授業においてコミュニケーションができた」と答えている。授業後の方が、「コミュニケーションができる」についてはるかに割合が高くなっている。特に、「とてもあてはまる」が授業前では34%であったが、授業後では72%と高い割合に上昇している。

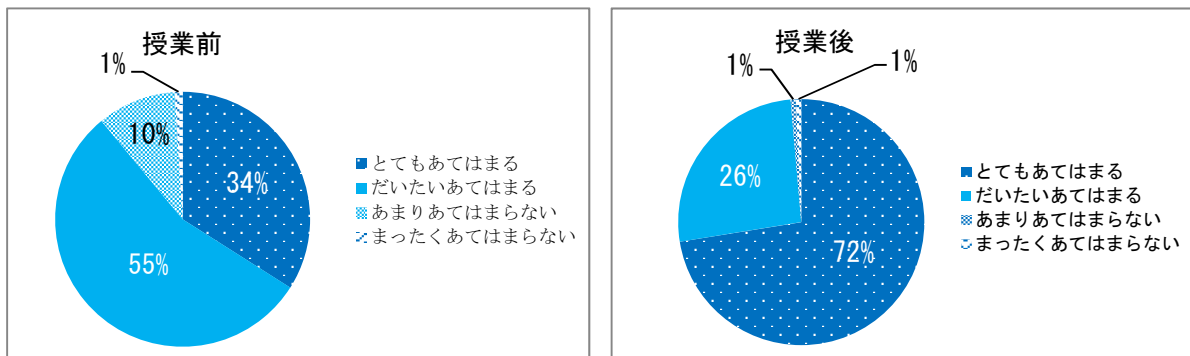


Figure 2 「ダンスでコミュニケーションができる」の質問についての授業前後の変化

次に、ダンスが好き・嫌いの群での授業前後を比較してみると、ダンスが好きな群および嫌いな群は、いずれも「とてもあてはまる」の人数の割合が増加した。ダンスが好きな群では、授業前では38%であったが、授業後では76%と大きく増加した。ダンスが嫌いな群においても、9%から68%に大きな増加を示した。「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」は反対に減少し、ダンスが好きな群では、0%であった。(Figure 3, Figure 4)

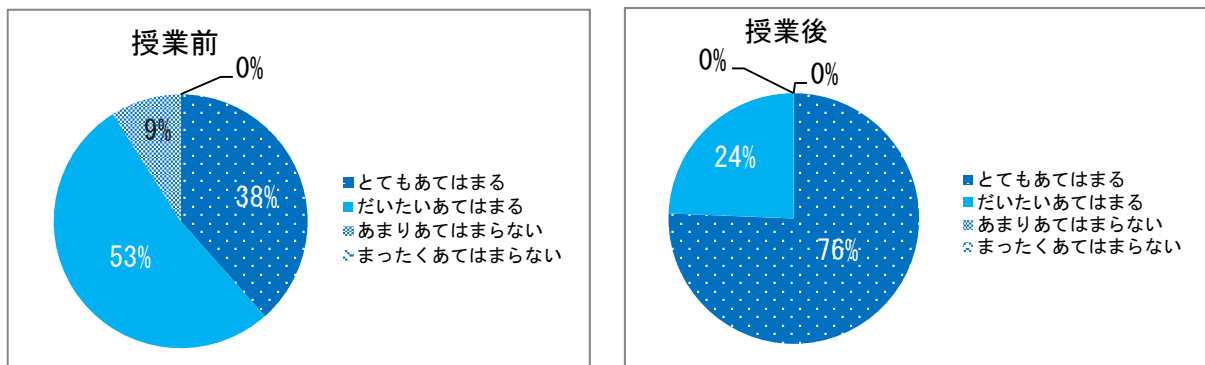


Figure 3 ダンスが好きな群の「ダンスでコミュニケーションできる」の意識変化

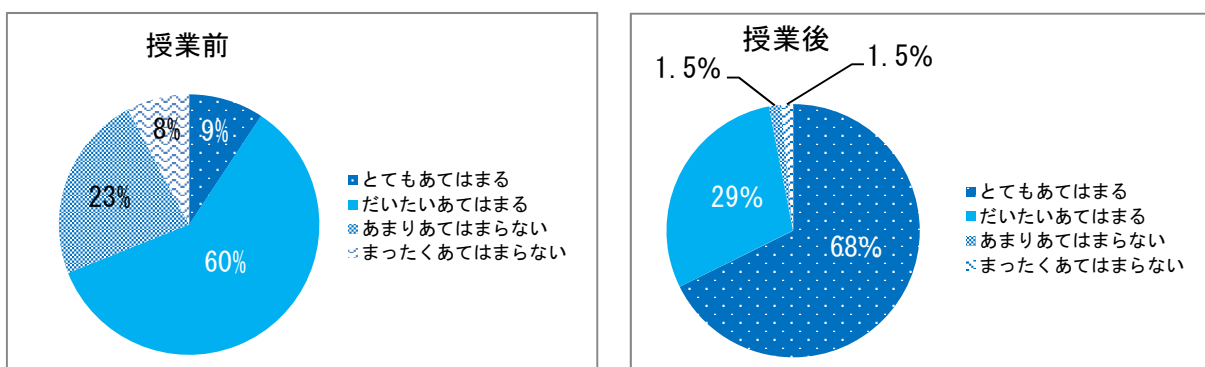


Figure 4 ダンスが嫌いな群の「ダンスでコミュニケーションできる」の意識変化

(4) 「コミュニケーションができた」と回答した授業内容

Table 4 コミュニケーションができたと回答した授業内容

番号	授 業 内 容	人数	割合
①	人間彫刻	93	26%
②	出会ってコミュニケーション	43	12%
③	ミラーリング	40	11%
④	人間パズル	27	8%
⑤	だるまさんの一日	27	8%
⑥	棒でコミュニケーション	23	6%
⑦	動きやリズムの即興表現	22	6%
⑧	ひとまとまりのダンス	22	6%
⑨	エアキャッチボール・エア縄跳び	21	6%
⑩	迷路探検	19	5%
⑪	名探偵ゲーム	13	4%
⑫	シェーハ	9	2%
	合計	359	100%

授業後の自己評価において、「コミュニケーションができた」と回答した授業内容を Table 4 に示した。学生がコミュニケーションができたと感じた内容を 3 つ以内で選択した結果、一番多かったのは、

グループでテーマを彫刻する人間彫刻という内容であった。テーマからそのイメージをグループで彫刻するように動くものである。次に出会ってコミュニケーションやミラーリングが多かった。出会ってコミュニケーションは、出会った人と瞬時にグループを作り一緒に動くものであり、ミラーリングはグループになって即興表現を行いながらまねしたりまねされたりしながら表現するものであった。

4. 考察

本研究は、大学のダンスの授業を通してコミュニケーション力が変化するかを検討することであった。授業前と授業後の調査結果から、表現力、他者受容、関係調整のすべてのスキルで有意な得点の上昇が認められた。よって、ダンスの授業を通してコミュニケーション力が肯定的に変化したといえる。

授業前の調査からは、本調査対象者は他者受容のスキルは高いが、表現力のスキルが低いという特徴が見られた。しかし、授業後では、表現力が最も上昇率が高かった。今回実施した表出系スキルである表現力は、自分の感情や気持ちといった情緒的な表出が中心である⁽⁹⁾という。ダンスの授業におけるコミュニケーションは、身体を通して感情を表現したり、そのイメージに合ったものになりきって思いを込めて表現したりするという要素が強い。そのような授業での体験を通して身体による表現力が培われたばかりでなく、もともと高かった他者受容もさらに高まり、関係調整も高まったと考えられる。

これらすべてのスキルの上昇に影響を与えた要因がいくつか考えられる。一つ目は、グループ活動である。学生の自己評価でのコミュニケーションができたと感じた内容では、人間彫刻や出会ってコミュニケーション、ミラーリングなどグループでの活動であった。もちろん意図的にグループ活動を多く取り入れたが、これらの内容は、グループで協力しながら特に相手を意識したり動きを共有したりするものであった。こういう活動はグループとして活動を行うなかで一体感を感じることが多い。また、毎時間グループ構成を変えたことで一人の学生が関わる人数が増え、それにより必然的に新たなメンバーとのコミュニケーション体験も増加する。村田⁽¹⁰⁾はグループについて、毎回流動する他者と向き合い「一人でできない動き」によってより立体的で表現的な他者との関わりを探求する活動であると述べ、それが群でのダイナミックな表現につながることを示唆した。加えていえば、そういった群、グループでの動きを通して一体感が生まれ他者との関わりが深まる、そこに友達との関係性が構築できる可能性が広がると考える。二つ目は、授業での即興表現・ミラーリングなど自分のイメージで自由に踊る体験を取り入れたことも影響要因と考えられる。とりわけミラーリングはその動きを他者が受け止めそれをまねしたりされたりするなかでダイナミックにその空間が展開されていったような感覚を生む。他者のまねという動きを通して自分の身体感覚や感情が奮起し自己意識が高まる効果につながると思う。まさに他者を通して自己と関わる経験がコミュニケーションスキルの向上に影響したと考える。

授業前におけるダンスが好きな群とダンスが嫌いな群と比較検討した結果から、すべての項目においてダンスが好きな学生は、嫌いな学生より得点が高く、コミュニケーションスキルが高いことが明らかとなった。ダンスは、身体を通して仲間とともに踊るなかでコミュニケーション力が培われることは文部科学省⁽¹¹⁾が指摘する通りである。ダンスが好きな学生はダンスの経験があると予想され、やはり元々高いコミュニケーションスキルを身につけていると推測できる。しかし、授業後において、表現力の「自分の気持ちを言葉で表現する」「自分の気持ちをしぐさで表現する」「自分の感情や心理状態を正しく察してもらおう」に交互作用が見られ、ダンスが好きな学生よりダンスが嫌いな学生の方が得点が高くなった。これは、ダンスが嫌いな学生はダンスに触れる経験も少なくダンスを敬遠して

いたと思われる。しかし、今回の授業を通してダンスに触れ、即興表現などの経験を通して「表現力」を身につけた実感を得られたことが著しく高い自己評価につながったものと思われる。

一方、授業後において「ダンスでコミュニケーションができる」と答えた学生は98%と高い割合を示しておりダンスの授業が学生同士のコミュニケーションに対する認識に大きな影響を与えたことが示唆された。とりわけ、ダンスの好きな学生の全員が「ダンスでコミュニケーションができる」と回答していることから、ダンスが好きな学生の方がよりそれを実感していることが示されたといえよう。

以上のことから、今回のダンスの授業を通して調査したすべてのコミュニケーションスキルが上昇しており、ダンス教育の教育的意義の高さが確認できたといえよう。

今後の課題は、コミュニケーションを検討する方法として、学生同士の具体的な行動面についても検討することである。さらに、今回は介入群と統制群による比較検討を行っていない。より厳密に検討するためには統制群との比較による方法を行い、この効果についてさらに検討を行う必要がある。また、対象者が大学1年生であり、大学入学後の前期の授業ということから友人関係を構築する時期でもあり、このような時期が今回の授業に何らかの影響を及ぼした可能性についても考慮する必要がある。

注・引用文献

- (1) 齋藤孝『コミュニケーション力』岩波新書, 2004, p. 4
- (2) 文部科学省「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～」『コミュニケーション教育推進会議審議経過報告書』2011, pp. 8-10
- (3) 文部科学省「学校体育実技指導資料 第9集 表現運動系及びダンス指導の手引」2013, pp. 4-5
- (4) 猪原真知子・中村恭子・川口千代「エスニック・ダンスを導入した創作過程におけるコミュニケーションの形成」『日本体育学会大会号』(38A), 1987, p. 254
- (5) 柴真理子『身体表現～からだ・感じて・生きる～』東京書籍, 1993, pp. 62-71
- (6) 平井タカネ(編)『ダンスセラピー入門—リズム・ふれあい・イメージの療法的機能—』岩崎学術出版社, 2006, p. 17
- (7) 藤本学・大坊郁夫「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ研究』15(3), 2007, p. 351
- (8) 藤本学・大坊郁夫「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ研究』15(3), 2007, pp. 351-352
- (9) 倉元俊輝・大坊郁夫「大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究：ENDCOREsを用いた検討」『対人社会心理学研究』12, 2012, p. 154
- (10) 村田芳子「ダンス学習とコミュニケーション—からだで語り合う世界—」『女子体育』38(11), 1996, pp. 42-46
- (11) 文部科学省「学校体育実技指導資料 第9集 表現運動系及びダンス指導の手引」2013, pp. 4-5